

Macbeth に つ い て

清 田 幾 生

An Approach to *Macbeth*

IKUO KIYOTA

「マクベス」劇は緊密な構成の短い作品でありながら、シェイクスピアの他の作品と同じように様々な解釈を許すものである。特にこの劇の場合主人公が度重なる残虐な行為の果てに破滅してゆくという筋立てであるので、観客或いは読者の主人公に対する感情にはきわめて複雑なものがある。つまり悲劇の主人公として一般の共感と同情を得るような条件が充分でなく、そこから主人公についてのいわゆる ‘paradoxical nobility’ の説が出てくる。そして主人公の「卑劣」に対する「高貴」の要素としてマクベスの罪の意識や良心の呵責、想像力、或いは人間存在についての真実の発見などがしばしば論ぜられている。ここで私は真実の認識者としてのマクベスをその identity を中心に考えてみたい。

(一)

その勇猛果敢な行動と名誉を重んずる態度のために国王の信頼は厚く、臣下たちも賞讃をおしななかった武将マクベスである。その彼が一体いつから王位篡奪という邪悪な暗い野望を抱くに至ったか、その主な理由は何か、などということはさして重要な問題ではない。我々が初めてこの主人公に出会うのは、スコットランドで謀叛が起り、ダンカン王による討伐の命をうけて彼がそれを無事平定し、凱旋の帰途のときである。そして舞台に初めて登場した彼が述べる最初の台詞のうちに我々には彼が恐い世界に足を一步ふみ入れようとしているのが感じられる。

So foul and fair a day I have not seen.

(I, iii, 38)

何げないこの言葉によって、自分でもまだ明確に意識していない野心という暗い兇悪な情念によってマクベスが揺さぶられ大きく動かされようとしているのが伝わってくるのである。なぜなら、この言葉をマクベスは主としてその日の霧と日光の交錯する不安定な天候状態についてか、或いはその日くりかえした激戦の状況について使ったつもりであろうが、この相反する二つの形容詞は、すでにこの劇の劈頭三人の魔女たちが雷鳴電光のヒースの荒野の中で合唱した言葉、

Fair is foul, and foul is fair:

(I, i, 11)

変が起る。大地はゆれ屋でも夜のように真暗となる天変地異がこの世をおおうのである。この自然世界の混乱と激動は、凡ての点で「寺院を宿とする岩つばめ」の平和な世界と対応しており、それがマクベスの内部に巣喰って彼を兇行へとつき動かした‘foul’なものなせるわざである。この二つの世界の激しい葛藤は、マクベスという人間の存在と置かれた条件を皮肉な対照で物語っている。マクベスが兇漢をさしむけ殺害させるマクダフの妻子もまた何の罪もない小鳥のように暮っていたのである。囚みにダンカン王やバンクオーと違ってマクベスには子供はいない。彼の数々の犯罪の無益と不毛を象徴するかのよう、たとえ王位を奪っても彼にはそれをゆだねるべき未来はないのである。マクベスは殺戮を重ねることによって生命と自然を破壊したはずであったが、最後にはダンカンの王子やマクダフという生命が「バーナムの森」という自然をまもって復讐にあらわれ、あわれな末路をとげてしまうのである。岩つばめが群れつどう自然の陽光はマクベスが破滅をむかえるまでその姿をあらわすことがない。

‘fair’ と ‘foul’ の相反する価値はいったんマクベスに意識されると彼の心を大きな混乱におとし入れる。あの残虐な犯罪の数かずを彼は平然と行うのではなく、暗い屈折した魂の動揺を経験しながら兇行にのめりこんでゆくのである。濃い霧の中で待ちうけていた魔女たちの予言が彼にその野心をはっきりと意識させるのに効果があったのも、彼が反乱軍を平定した勝利感の絶頂にあったからであろう。しかし魔女から「いずれ王となるべき者」という予言をきいたときの彼の最初の反応は、何か人に知られてはいけない事が露見した時のような、驚きと怖れである。武勇すぐれた將軍にふさわしからぬ驚愕の表情をみて、同行している僚友のバンクオーはたずねる。

Good sir, why do you start ; and seem to fear

Things that do sound so fair ?

(I, iii, 51-52)

バンクオーは恐らく軽い意味で無意識のうちに ‘fair’ という語を用いたのだが、彼の運命を考えると、これもまたアイロニーをおびている。それと同時に今バンクオーが見逃がさなかったマクベスの恐怖心の中に彼の転落に至るまでの悲劇の意味がかくされていると言ってよい。それは彼が絶えず示す一つの性癖であり、まず一つのあらわれとしては罪の意識と良心の呵責という形をとってくる。しばしば指摘されることであるが、野心と良心の激しい葛藤がマクベスの「悪」をたとえばイヤゴーやゴネリルのそれから区別するものであり、麻のようにみだれる心の動揺と罪悪感が彼をリチャード三世とは全く違った人物にしている。だから魔女の予言をきいたすぐあとその場へ来た使者からダンカン王が戦功をたたえて彼をコーダーの領主に封じたという伝えを聞いたとき、自分の胸に抱く野望がうずくようにふくれ上ってくるのを感じながら、恐しい動揺に見まわれるのである。

This supernatural soliciting

Cannot be ill, cannot be good : if ill,

Why hath it given me earnest of success,

Commencing in a truth ? I am thane of Cawdor :

If good, why do I yield to that suggestion
 Whose horrid image doth unfix my hair
 And make my seated heart knock at my ribs,
 Against the use of nature? Present fears
 Are less than horrible imaginings:
 My thought, whose murder yet is but fantastical,
 Shakes so my single state of man that function
 Is smother'd in surmise, and nothing is
 But what is not.

(I, iii, 130-141)

忠節をちかった臣下として今のままでいるべきか、王位をねらうべきかの選択の問題と共に、人をたぶらかして喜ぶ魔女のこの「誘惑」はマクベスの燃えさかる野望とそれを実行することの恐ろしさで戦慄させる。彼は懊悩し想像力は異様にふくれ上り、現実と幻影の区別がつかない程である。国王の高徳と慈悲心を思っては天罰を恐れ、復讐されはしないかと不安を感じる。彼がもっとも恐れているのは人間世界から孤立してしまうことである。マクベスは誰にもましてあの岩つばめの象徴する世界の意味を知っている人間である。彼は今選択と決定の不安にゆさぶられながら、しかも絶えず自分の恐怖心を意識しないではいられない。想像力がマクベスの特徴であって、錯乱して平衡を失った感覚は、現実でない様々なものを彼に見せるのである。だから国王殺害の決行の前には自分を導く短剣の幻を見るのであり、バンクオーを殺したあとではその亡霊を彼一人が見なければならぬ。良心の呵責や罪悪感に悩まされることは別の表現でいえば自己の情念や行為を 'foul' だと見なす視点に立っていることである。マクベスはこの道徳的な認識力を最後まで失ってはいない。ダンカン王弑逆の大義は自分には何一つなくなただるのは野心のみであることも知っているのである。しかしながら彼に於てはこのモラルの認識の原理が決して行動の原理とはならなかったのである。

(二)

マクベスの倫理意識はダンカン王が彼の居城を訪問したときにマクベス夫人により無効にされ、彼は悪の道に方向づけられる。王妃の地位をねらう夫人は、絶好の機会を前にして野望実現の決行をためらい罪の意識に悩んでいるマクベスの前に、夫の「良心」なるものを一方的に定義し、突き出して見せるのである。逡巡するマクベスを叱責し励ましながらい行に走らせる彼女の冷酷残忍な言動は圧倒的である。ここで起るのは、戦場では獅子奮迅の働きをして、公的には「勇敢なるマクベス」、「武勇の寵児」だと人からたたえられる武将マクベスの気性が、家庭にあっては冷酷な夫人の目から見ればまるで子供のそれだというアイロニーである。

…… yet do I fear thy nature ;
 It is too full o' the milk of human kindness
 To catch the nearest way :

(I, v, 17-19)

と彼女は傲然と言い放つ。不安におののき自信喪失しているマクベスに対して彼女の叱咤激励が

恐るべき効果をもったのは、それが動揺している夫の弱点を見事についたからである。彼女の論理は単純なものであって、それは要するにマクベスの愛情をうたがい、夫の男らしさに疑問を呈することであるが、単純なだけにマクベスの心に強烈に突き刺さってゆくのである。夫を臆病者呼ばわりし、「自分の望んでいる事を勇敢に行為に表わすことが怖いのですか」と彼女は嘲りをこめて叱責するが、まるで殺人を犯すことによって一人前の男になれると言わんばかりの口調である。この論理はあとでマクベスがバンクオーの亡霊を見て錯乱した時も、「あなたはそれでも男ですか」という叱責にくり返されており、夫を励まし殺人に駆りたてる彼女の言葉には夫の無能を嘲るような性的な意味すら暗示されている。だからマクベスが錯乱状態の中で、短剣の幻影に導かれよろよろとダンカンの部屋に歩を進めるとき、彼の想像の中では殺人行為が人妻を犯すイメージと重なるのである。

…… and wither'd murder,
 Alarum'd by his sentinel, the wolf,
 Whose howl's his watch, thus with his stealthy pace,
 With Tarquin's ravishing strides, towards his design
 Moves like a ghost. (II, i, 49-65)

しかしマクベス夫人の言葉が自信をなくしてためらう夫に圧倒的な説得力をもつのは彼が夫人の口から次のような言葉を聞くときである。

I have given suck, and know
 How tender 'tis to love the babe that milks me :
 I would, while it was smiling in my face,
 Have pluck'd my nipple from his boneless gums,
 And dash'd the brains out, had I so sworn as you
 Have done to this. (I, vii, 54-58)

非情なマクベス夫人の言葉に見られる恐ろしい意志の迫力は、その中に一点女性らしさがただよっているだけに、一層強化され、兇悪なひびきを持つのであるが、今のこの夫妻に見られる強い女と弱い男のあり方はマクベスの心の奥底にある一つの心理的傾向をおのずから説明しているものと思われる。

良心のうずきと犯罪の恐ろしさにさいなまれながら、それでも結局心に巣喰った暗い邪悪な情念の声に従う羽目となってしまったのは、以前バンクオーに指摘された恐怖心におそれおのっている自分を意識したからである。暗殺を想像しただけで胸に浮かんでくる自責の念と恐怖心、これを自分の内部に発見したとき、マクベスは怯えている自分を受け入れることが出来ない。マクベスの心の中にとりわけ大きな権力欲や支配力、名誉欲や物欲がうずまいていたというのではなく、ただ彼は国王を暗殺出来ないような弱い人間でいたくなかったのである。この複雑な感情はまさしく 'fear of fear'^② であり、この「恐怖心に対する怖れ」がマクベスの悲劇の発端であると言ってよい。夫人に唆かされてマクベスが決行した国王暗殺という行為について Bradley

は次のように述べているが、この評言は実に鋭い洞察を示しているものと思われる。

…… the deed is done in horror and
without the faintest desire or sense of glory,—done,
one may almost say, as if it were an appalling duty ;^③

マクベスは絶えず自分の内面をのぞきこんでいてそこにあるべきでない自己が見つかり、自分が許せない苛立たしさにおそわれる。良心の告発にためらい怯える自己の実像に耐えられずそれを殺戮という行為の大胆さによって補おうとする試み、これがバンクオー殺害にもはたらく意識下の心理劇なのであり、彼の兇行が **Bradley** の言うように「あたかも恐ろしい義務であるかのよう」に行われる所以でもある。マクベスは行為によって自己を定義づけたいのである。一つの行為をなしとげることによって真の自分とは異った別の人物になることを志すが、しかしマクベスは行為をなしとげたあとでも矢張りそこには許容しがたい不満足な自己しかいないという幻滅を味あわされる。そういうマクベスの **identity** の問題だけに限ってしばらく彼の心理をながめてみることは意味のないこととは思われない。ダンカン王を暗殺し待望の王位についたものの、マクベスは眠りを奪われ、悪夢に苦しめられ、しのびよる何ものかの影におびえながら、気も狂わんばかりに戦々競々としている。彼はこの地獄のような苦しみよりも、むしろ自分が殺した死者の平安をうらやむ。

Duncan is in his grave ;
After life's fitful fever he sleeps well ; (III, ii, 22-23)

マクベスは自分を自分ではないものと比較することによってしか考えられない人間であり、自分の内部をのぞきこむのを常としながら自分というものを静止させて眺めることの出来ない性格である。あれ程その地位を渴望していた国王となって初めて彼がもらす言葉にもそれがうかがえる。

To be thus is nothing ;
But to be safely thus. (III, i, 48-49)

これはマクベスが自分の行為の結果が何であったかを知った恐ろしい瞬間である。結局は自分の存在が **nothing** であるというこの感覚、つまり、良心の呵責と罪の意識に悩まされながら精神的な高い代償を払って得た国王という今の自分の境地が結局は空無であるというどうしようもない感覚、マクベスは片時もこの空しい徒労感に悩まされることがない。それならこの不安な空虚をうずめるために、自分が別の何者かになるために、再び何か行動しなければならない。こうして不毛な殺人は新たな殺人を呼ぶのである。ある筈もない心の安泰を求めて、恐怖心を感じない自己となるために、次はバンクオーを犠牲にしなければならない。彼がひそかに刺客をはなしてバンクオーを殺害させたのは、バンクオーは「国王にはならないが国王の先祖となる」という魔女の予言を恐れたからでもあるが、一方ではバンクオーには、「高潔な人格、勇気それに頭のよさ」がそなわっているからでもあり、これらの美德が自分にはない事をマクベスは知悉してい

るからである。そして王位という名誉を身につけても衣裳に実質が伴っていないことを痛感しているマクベスは自分の罪を恐れ嫌悪し自己欺瞞の意識にさいなまれるのである。犯罪の結果、彼にとって一番耐えがたいことは、偽善の態度をつづけなければならないことである。僚友だったバンクオーの暗殺を決意して彼は自分の心の中をのぞきこみ、その醜悪さにむかつくような気分を覚え、こう言わざるをえない。

O, full of scorpions is my mind, dear wife! (III, ii, 35)

マクベスの科白の中でもっとも苦悶にみちたこの言葉は、夫人に向けられたものであるが、真実と虚偽の落差に悩む彼の心の測りしれない暗さをよく物語っている。そして他ならぬこの息苦しいばかりの自己嫌悪こそが新たな犯罪の動力となって彼をさらに自暴自棄的な行為につき動かすのである。彼は静止してはいられない。動くことが自己を自己でない者にしてくれるだろうと願うのである。不安な自己から逃れ、分裂した自分の姿を行為でうずめ一致させようとするときにはきまって自分を鞭うつかのように行動への決意が語られる。

Words to the heat of deeds too cold breath gives. (II, i, 61)

Things bad begun make strong themselves by ill. (III, ii, 55)

Strange things I have in head, that will to hand;
Which must be acted ere they may be scann'd. (III, v, 139-40)

ここには自己の存在に対する不満と不安が切迫した危機感となっていて、行為への焦りを生み出している。その行為の結果としてこれ程残酷で血腥い現実性を呈しながら、一方マクベスの行動の動機には、だから、どこか具体性を欠いた所があって、度重なる兇悪な犯罪にひたむきのめりこんでゆく彼には不思議なことに一種きまじめな悲壮感がただようのである。大それた行為のおぞましさに胸のわるくなるほど嫌悪感をおぼえながら、同時に彼は恍惚として憑かれたように行為の恐ろしさに引きつけられてゆく。ここには理性と情念の分裂を行為によってうめようとする禁欲的な魂の不幸なオブセッションがあり、ひたすらに自分の本当の姿に盲目になろうとする意志だけが見えている。真の自己とは異った者になりたいという身も世もない激しい願望、この暗い焦燥感がたび重なる残虐な殺人となって、いたずらに空転する。「マクベス」劇の世界はこの焦燥感がひらめく短剣や流れる血となって暗黒の中で燃えたつ世界である。その世界の闇の中で彼は未来をたぐりよせ、自己でない自己を追い求めようとむなしい行動をくり返す。しかし求めようとする自己像は所詮虚像にしかすぎず、結果としてそこにあるのは「悪」の不毛な無窮動であり、閉ざされた暗い心の喪失感である。このことはこの劇を認識の劇と考えるさいに忘れてはならないことと思われる。マクベスはダンカン王を殺害したあと、呆然としながらもその血まみれの手をみて恐ろしさに耐えかねこういう言葉を言わずにはおれないのである。

To know my deed, 'twere best not know myself. (II, ii, 73)

彼は殺人行為によって *identity* の確立をもめざしたはずであったが実は真の姿から逃れようとしたのであり、行為のあとでも自己に直面することは出来ないのである。この科白は、自分を意識しないではいられないことの苛立ちを示していると同時に、真の自己に出会い、それに直面することの恐怖感を表わしているといつてよいだろう。マクベスの内部はこの恐怖感と良心が相戦う凄絶な魂の苦悶の世界である。こうして彼は自分の倫理感が信奉しているあの岩つばめの象徴する世界からますます引きはなされ、正常な人間関係と自然の世界から孤立してゆくのである。

この劇を緊密なものにしているのは詩的なイメージ群にもまして、*dramatic irony* である。翌朝ダンカン王殺害が発見され、騒然としている王子たちや貴族たちの前でマクベスが深い悲嘆にくれるふりをしながら言った言葉にもアイロニーがふくまれている。

Had I but died an hour before this chance,

I had lived a blessed time;

(II, iii, 96-97)

もちろんこれはマクベスがこの兇行に自分が関係ないことを皆に印象づけようとした欺瞞の弔辞である。しかし一方では無意識のうちにこの空疎な言葉に本心を吐露しているのであって、王よりも一時間前に死んでいたら犯さずにすんだ自分の罪を心の奥底では後悔しているのである。恐らく或る意味ではこの時こそがマクベスのもっとも幸福で充実した瞬間であったといつてよいであろう。なぜなら、一歩行為にふみ出したことからくる高揚感よりも、表向きの意味と真情とを一つの表現の中に矛盾することなく語りえた統一感をもったからである。真実と虚偽の悩ましい分裂に襲われることなく、自己欺瞞と偽善の恐ろしい意識に苦しむこともなく、意識下の私的な表現がそのまま公的な表現に調和したときだからである。少くともこの瞬間はマクベスは真の自己とは違った自己になりえた満足感があつたはずである。このときからマクベス夫人が全く思ってもみなかったことに、マクベスは弾みがついたように積極的な行動を見せ始める。犯跡をごまかすために、ダンカン王の血糊がついた短剣を隣室に眠っている従者たちにもたせて、彼らに罪をなすりつけることまではマクベス夫人の考えた陰謀の筋書であつたが、犯人に仕立てた従者たちを国王殺害が発見されたとき、夫は有無を言わず殺してしまったのである。予想外のことで夫人は驚倒するが、マクベスは夫人の勢力から独立して自らの意志で走り出したのである。これ以来この劇のアクションの最大のアイロニーが始まるのである。つまりマクベス夫妻の力関係は逆転し、確信にみちていた残酷なマクベス夫人の世界はもろくも崩れ始めるのである。

マクベス夫人は実際には本当の自分の身の丈以上に背のびしていたのであり、もともととは非情冷酷な女ではなかったのである。自ら女であることをやめようと願う彼女の意志はひたすら権力の地位に集中されていて、マクベスのように慄然として自分の心の中のをぞきこむようなことを拒否していたのである。夫を叱咤激励し、ダンカン王殺害にかりたてたあと彼女が、

Had he not resembled

My father as he slept, I had done 't.

(II, ii, 13-14)

とつぶやく恐ろしい言葉の中にも、すでに女性らしい弱さがほのみえており、抑圧されていた女性らしさはやがて彼女に復讐することになる。王妃の地位への渴望からくる極度の緊張のために、彼女はマクベスのように錯乱しながらも一つの行為の中にその行為の結果や余波まで思いをめぐらす想像力をもっていない。彼女には自分たちの行動の真の意味を正しく認識する余裕もないのである。たとえばマクベスはダンカン王殺害の直後に恐ろしい発見をする。

Methought I heard a voice cry 'Sleep no more!

Macbeth does murder sleep'

(II, ii, 35-36)

眠っているダンカンを殺すことによって、実は自分の眠りを殺してしまったということ、加害者になった途端にとりかえしのつかない程に被害者に転落してしまったということ、マクベスはこの皮肉な真実を行為の直後に感受し、体験する。しかしマクベス夫人にはそのような啓示の瞬間は訪れない。夫のそのような、恐ろしい真実を発見する想像力と彼女は無縁であった。囚みに夜の闇の中で流される「血」と、舞台を支配する「恐怖」、それにこの「眠り」がこの劇の大きな詩的象徴となっていて、これ以後マクベス夫妻は正常な「眠り」を奪われるのであるが、皮肉なことに正気を失って錯乱し、先に滅んでゆくのはマクベス夫人の方である。

あれ程願っていた権力を手中におさめて、戴冠式もすみ祝宴を前にしてマクベス夫妻は行為のもたらす充実感どころか、何やら故知れぬ失望と幻滅を味あわなければならない。本来のあるべき姿、正常な人間性から逸脱し、無辜の生命を奪ったマクベスは、「すべて生あるものの養いとなる」眠りから見放されている。マクベス夫人は過度に意志を集中していた緊張もなくなり、今ではその虚脱感の中で王妃の栄光も空しいものに思われてくる。彼女が一人でいるときにもらす科白には何の充ちたりた気分はなく倦怠感と後悔の色が濃い。

Nought's had, all's spent,

Where our desire is got without content:

'Tis safer to be that which we destroy

Than by destruction dwell in doubtful joy.

(III, ii, 4-7)

もはやここには虚勢をはっていた以前の彼女の冷徹非情さはみじんも見られない。凡てが徒労であったのではないかという空虚な心境、それにむしろ死者の平安をうらやむ気持は、マクベスのそれと同質なものである。不眠に悩み、悪夢に苦しめられ、自己嫌悪の言葉をばくマクベスを夫人はけなげに慰めるが、二人は悲惨な喪失感を共有しているが故に、この時がこの兇悪な夫妻の心がいちばんふれ合ったときである。ただ彼女の不幸は相変らず夫の心の奥底を洞察出来ないことである。権力の地位がこれ程に空しいとは予想もしていなかった夫人は、自分自身を誤解していたように夫をも理解していない。それは他でもない想像力をもっているが故に行為を前にして思い悩んだマクベスとその想像力ゆえに新たな殺人を重ねなければならなかったという事情である。成長し独立してゆこうとするマクベスの意志を読みとることの出来なかった彼女はますます手のとどかない所へ突き進んでゆく夫の世界から完全に脱落し、最後には神経に異常を来

し、夢遊病者となりはてるのである。かつては、ダンカン王の血で朱に染った手をみておびえるマクベスに、「少しの水があれば証拠は洗い流せます」と冷然と言い放った彼女は、今では過去の血の思い出に苦しめられ、手をすり合わせながら狂気の中で

…… all the perfumes of Arabia will not sweeten this
little hand. (V, i, 7)

とうわ言をいわねばならない。この精神的崩壊とそれにつづく彼女の自殺の原因は、罪に対する良心の苛責はもとより、夫婦の大きすぎた距離にあると言ってよい。

(三)

ダンカン王を殺害しその地位を奪うことはマクベスにとっては自分を国王だと限定づけることによって自分の存在に充実感を与え、実像とは異った *identity* を確立することであった。しかし借り物の衣裳は所詮身につかないことを王位就任を祝うはずの宴会でバンクオーの亡霊に出会うことによって思い知らされたのである。ここでも我々は良心あるが故に錯乱するマクベスの痛ましい魂を見ることになる。彼一人にしか見えない亡霊は彼を恐怖で根底からくつがえし、自己の虚像は音をたててくずれてゆき、自分の行為の意味をいやという程悟らされたのである。並みいる家臣たちの手前、夫人がマクベスの錯乱をどうにか取りつくろうが、祝宴はみじめな散会となり、マクベス新王への不信と嫌疑だけが出席者たちの間に残ったのである。ここで再び彼は空虚感に襲われてしまう。真の自己とは違う自己になることに失敗したみじめな自分を意識するだけに、虚像を追い求める狂おしいばかりの渴望は、彼に片時も安堵と満足を与えることはない。マクベスの行為は、犯罪者自身でもどうしようもないくらいとどまらないのである。ここまで他人の血に汚れてしまってマクベスは、行為の意味とその不毛性を一方では予知しながら、もはや情性にまかせて絶望的に犯罪の道に突進してゆく以外に道がないことを知っているのである。

I am in blood
Stepp'd in so far that should I wade no more,
Returning were as tedious as go o'er : (III, iv, 136-138)

自己が空無であるという意識に悩まされ絶望感にとらわれて、マクベスは再び魔女の所に予言を求めてゆくが、それは自分に出来ない自己定義を魔女の超自然の力に期待したからに他ならない。魔女たちから将来の命の保証めいたものは与えられたものの、教えられたマクベスの曖昧な未来像は絶望的であり、それだけに再びマクベスは自らの力で実像とは異った自己の輪郭を形づくる行動にのり出さねばならない。もはや自暴自棄の暴君となったマクベスの残虐非道ぶりは、マクダフの城を襲い何の罪もないその妻子を惨殺することで頂点に達し、乱れに乱れたスコットランドは今では呻吟と悲嘆にみちた「国家というよりは墓場、笑う者とていない」国となりはてている。マクベスは行為の結果が反作用的に自分に影響を及ぼして来なければ自己の存在感すら感じられなくなってしまうのかも知れない。多分復讐されることが彼の真の自己を定義づ

けてくれるであろう。ここに至ってマクベスはダンカン王やバンクオーの時のように犯罪を秘密裡に行うのではなく、公然と無意味な殺戮を重ねるのである。明らかな犯罪、公然たる殺人の利点は少くともあの悩まして偽善の意識、真実と虚偽の分裂に悩む必要はないことである。恐らくこの時期にはマクベスの自己嫌悪は幾分軽減されていた筈である。それどころか非人間的な怪物となりはてた彼にはむしろ破壊し殺害することの陶醉感の方が強かったかも知れない。

(四)

やがてマクベスの内部に今までと違った変化が訪れるのは、虚像を追い求める彼の残忍な行為の結果が、彼に向かって逆襲してくるときである。自己の行為の反動が大きな厄災となって襲ってこない限り、彼の不毛な動きは止まらないし、彼も真の自己に会うことがない。求められすぎた虚像が彼の実像に報復するときに近づいて来た。ダンカンの王子や、妻子を殺されたマクダフらは決起し、マクベスの虚像を実像の方へとおし返してくるのである。彼らは正義の復讐者として怒濤の如くおし寄せてくるがそれは本当のマクベスを定義づけるために、つまりマクベスが実は何者であるかを思い知らせるためにやってきたのである。受け身になって防戦しなければならぬマクベスは衰亡の時をむかえて守るべき自己とは何かとあらためて真実の自己をみつめないわけにはゆかないであろう。この頃から没落が近づいたマクベスは我々の想像の中で現実的な存在感をもち、彼の物の感じ方が我々の世界に近づいてくるのである。ここまで悪の道に沈淪してしまったマクベスではあるが一方モラルの認識力がすっかりなくなったわけではなく、今までは何も未来の自己像を求める激しい願望から、人間らしい世界、うるわしい愛と自然の世界に耽て盲目になっていたにすぎない。立上った復讐者たちの軍勢にかこまれて、治る見込みもない狂気の病いに冒されたマクベス夫人を気づかうマクベスには、かつて夫人を *'my dearest partner of greatness'* 或いは *'my dearest love'* と呼んだ人間らしい愛情は失われてはいないのである。亡霊のようにさまよう崩壊寸前の夫人の有様は彼に破滅の時が近づいたことを予見させたであろう。我々が彼の変貌に気づくのは、せばまってくる敵の包囲の中で激戦の準備に忙しいさなかの苛立つマクベスがふとらす述懐をきくときである。恐怖のあまり味方の兵からも逃亡者が続出する絶望的な状況の中で、これが乾坤一擲の戦いだと自らを励ましながら、ぼつりと彼はつぶやいたのである。

I have lived long enough : my way of life
Is fall'n into the sear, the yellow leaf ;
And that which should accompany old age,
As honour, love, obedience, troops of friends,
I must not look to have ;

(V, iii, 22-26)

もはや尊敬や愛情、恭順や友人も諦めなければならないと暗澹とした気持で彼は言う。マクベスは彼なりに、兇悪な自分の行為が、人間存在を意味あらしめているあの岩つばめの象徴する世界

から、どれ程距離が開いてゆくかをひそかに測っていたのである。うるわしい人間関係の世界から自分がどれ程遠くはなれてしまい、どれ程孤立しているかに気づくマクベスの言葉にはいいようもない淋しさがある。後悔しているのでもなく、ただ自己崩壊を予感しているマクベスには深い喪失感がある。しかも今までと違うところは我々はこの瞬間のマクベスを静止していると感じることである。ある筈もない自己の虚像を求める狂おしい動きをやめて、今彼には自分の実像を下降感覚の中でとらえることが出来ている。もはやここには真実の自己から逃れようとする彼はいない。自分の凋落を秋の葉にたとえるこのマクベスに今起っていることは、別人になろうとして空しくもがいている状態ではなくて、自分をそのまま認識しようとしているということである。このときマクベスの閉ざされていた暗い魂は、苦い内省を通して、現実というものにふれていると言ってよい。それにつづく次の場面で彼がいう言葉にもその傾向ははっきりと感じられる。

I have almost forgot the taste of fears :
 The time has been, my senses would have cool'd
 To hear night-shriek ; and my fell of hair
 Would at a dismal treatise rouse and stir
 As life were in 't : I have supp'd full with horrors ;
 Direness, familiar to my slaughterous thoughts,
 Cannot once start me.

(V, v, 9-14)

自己の内部に発見するのがあれ程不安であった恐怖心をもとより今克服したというのではなく、恐怖心に見はなされた自分に気づいたのである。マクベスに於ては恐怖心は多義であった。それは臆病者の怯えと不安とを意味する一方、良心の苛責や罪の意識をも意味していた。この両者の意味を含む人間らしい感情に対する麻痺感を自覚することによって、彼は自分が何を失ったかを知ったのである。ここには自分の行為ゆえに堕ちてしまった自己に対する痛ましい程明晰な認識がある。彼が真実の自己とは何物であるかを知らねばならない時は近づいたのである。しかし非人間となりはてたマクベスの実像はとりかえしのつかないものではあるがまだ実像としてそこにある。

もはや遅すぎるのであるがマクベスの実像がこうして現実にもふれたと思われた時マクベス夫人の死の報せをきいたのである。これは決定的であった。この場合彼を襲ったのが絶望と虚無というのは間違った表現法ではないが、ただそれだけだったとは思われない。恐怖感もなくしてしまったマクベスにはだから個人的な感慨や悲嘆に暮れる余裕はなかった。確実なことは彼の実像が完全に崩壊し、絶望の中で無限に相対化されてしまったことである。別の表現で言えばマクベスはこの時実像である「私」を根底から奪われてしまったのである。だから次の科白の中では、今まで彼の長い独白には必ず出て来た第一人称がなくなってしまうのである。それは彼が次に「私」をとりもどすまでのごく短い時間の出来事であったが、一瞬時間はとまり、現実はこの世のものでなくなり、そこで何事かが起り、不思議な事に亡霊のように独語する彼は今までになく巨きな姿となって我々の前にいるのである。一番身近かであった者の死が彼に生の意味を一挙に悟らせ、

それを一般化させ、一つの荒涼として陰鬱な表現へ彼を促したのである。

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,
 Creeps in this petty pace from day to day
 To the last syllable of recorded time,
 And all our yesterdays have lighted fools
 The way to dusty death. Out, out, brief candle!
 Life 's but a walking shadow, a poor player
 That struts and frets his hour upon the stage
 And then is heard no more: it is a tale
 Told by an idiot, full of sound and fury,
 Signifying nothing. (V, v, 19-28)

この独白がこれまでのマクベスの内面の劇の総決算であり、ここに於て認識の悲劇としての「マクベス」劇は頂点に達していると言ってよいであろう。マクベスは今我々の目の前で巨大な身の丈を獲得して迫っている。やがて来る破滅を予感しながらそれを見つめているとき、この暗い主人公はいま、この劇の他の人物たちの誰にもとうてい期待できないような一つの「高み」に達していると言ってよい。この劇で「善」の側に立って、「悪」のマクベスに復讐を行う人物たちが一様に影がうすく、あまり共感をさそわないのは彼らが今のマクベスのように恐ろしい真実に出合う瞬間を体験しないからである。たしかにこの科白には絶望と虚無感しかない。「人生は歩く影にしかすぎない」……この言葉をはく人間が生に対する敗北を喫した者であることは明らかである。あれ程の残虐をくり返しながらここに一片の罪悪感も良心のかけらも見られないことも確かである。この人生侮蔑と厭世の歌が数々の悪事に身をささげた者の当然の帰結であることも間違いない。しかしそれにもかかわらず彼の言葉が「詩」となって我々に訴えてきて、このような人生観をもっていない我々の共感をさそうのは何故であろうか。それにしてもこの台詞が我々の心に痛切にしみこんできて不思議ななぐさめを感じさせるのはどうしてであろうか。この台詞をのべるときのマクベスが大きな姿に見え、そこに崇高なもののさえ感じさせるのはなぜであろうか。

その理由を十分に説明することに大きな困難が感じられるが、ただ理由の一つとしてマクベスの静かな内省からくる自己認識ということがあげられるのではなかろうか。我々はダンカン王やバンクオー殺害前後のマクベスに良心の告発に苦悶する痛ましい姿をすでに見ている。そこには罪の意識と自己嫌悪にあえぐ暗い閉ざされた魂があった。しかしそれだけではこの独白をするときのマクベスの偉大さを説明しつくしたことはならない。その頃のマクベスは真実の自己というものに直面し、それを認識してはいないからである。ふりかえてみれば、二度にわたる魔女の予言をきいて以来、真の自己とは異った自己になろうというあの一刻の猶予も出来ない激しい自己定義の願望にかられて悪の世界にのめり込んできた。それは彼の倫理意識が信奉するものとは全く逆の世界であった。自分の真の姿を見つめることもなく、空無感に苦しめられ虚像を求めて行為に走ったのである。そこには行為によって別人となり他者との人間関係をつなごうと願う

心理も働いていた。その「悪」がくりひろげる血腥い荒廢の中で彼は復讐されることにより虚像はみじんに砕け散り、誰一人として彼を信ずる者はいなくなったのである。マクベスはまた、あの岩つばめの象徴する世界と自分が対極の位置にあることも知った。そしていま孤独の中で近づく破滅を予感している時に、この世と彼をつなぐ唯一の絆であるマクベス夫人の死に遭ったのである。この絶望と虚無の中で彼は静止し、自己の恐ろしい実像に直面したのである。すべてをなげうって自己の虚像を悪の極限まで追い求めた果てに彼は自分の行為が何を意味したかという最後の真実に出会ったのである。他ならぬ自分が作り出したこの混乱の中で、彼は完全に崩壊してしまった自己を初めてつきとめ、確認し、それを定義することが出来たのである。彼が発見し認識した極限の自己像とは、この台詞の最後に出てくる単語——そして今まで条件付きではあったが幾度も自分はそうではないかと疑い、そこから是が非でも逃れたいと思ったもの——‘nothing’なのである。

もはやどう動かしようもない最終的な実像である。マクベスはこの実像を今受け入れ、自分に許容するのである。解体し、崩れ去ってしまった自己の実像は空無であり、その空無をつきとめた自己もまた空無である。やがて彼の認識の中ではその空無は他者と融合し、人間一般と一体化してしまう。人生はすべて空無なのである。マクベスはその人間全体を見下ろしているのであって、その鳥瞰図がこの独白のすべてなのである。

いよいよもなく荒涼として暗澹たる世界である。しかしマクベスは、悪の不毛性を知りながら、全存在をかけ自己を燃焼させつくしてしまったその果てにこれを認識し容認したのである。この時マクベスは限りない絶望感におそわれたと同時に、不思議な安堵をも感じなかったであろうか。暗黒の虚無の中で彼には認識したことの誇らしいよろこびがなかったであろうか。彼の栄光と悲惨はここにあると言ってよい。限りない虚無の深淵をのぞきこんだというその事実が彼を高い位置におき、身の丈を巨きくさせているのである。独白に見られる厭世的な人生否定の論理に我々は感動するのではない。マクベスがこの台詞を語ることに彼の暗い偉大さを感じ、不思議な共感を抱くのである。恐ろしい人生の空洞を見てしまった彼の体験と認識の重みがこの独白の「詩」を支えていると言ってよい。ここに到達したマクベスを見ると我々は今まで閉ざされていた暗い魂がこの世のものではないものにふれていると感じる。マクベスはもはや他の登場人物、或いは我々と次元を異にしている世界を超えてしまったのである。遠ざかることによって小さくなるのではなくて、超えることにより大きな姿となって。

これは道徳或いは宗教的なものではなくて、劇的眞実というべきであろう。数多くの犠牲者をつくったマクベスは、その残虐な行為に何の反省も考慮も行っていない。徹底的なエゴチストである彼の内面はあくまで自己完結的なのである。しかし、恐怖感もなくなってしまったマクベスに今さら悔恨も罪の意識もあろうはずがない。彼に残されたのは、絶望か人生への侮蔑かどちらかである。己れの節をまげずに妥協しなかったことにマクベスの悲劇の主人公（もし「マクベス」劇が悲劇だとすれば）としての暗い「高貴」性があるのではなからうか。良心や罪悪感はこちら

側の人間が感ずべきものである。「マクベス」劇の作者がマクベスに道徳的宗教的な救済をもたらすことなく、見事な離れわざで以ってこの「悪」の主人公を一挙に聖化するのもこのときである。絶望であれ虚無であれ本当の自己に出会い、真実を発見し、そこから他者の世界をながめるマクベスには絶望の暗さはあるがそれと共に平静なものがある。すべてを認識したことからくる観照的な雰囲気は彼の言葉全体に漂っていて、この台詞を東洋風な諦念や無常感に近づけているのである。まさしくマクベスという人間像は虚構性の傑作という他はない。この兇悪な犯罪者が一見聖者めいてみえるアイロニーはそこにあって、シェイクスピアはいわば裏返しの悪の聖者を造り上げたのである。この科白の中に **biblical allusion**^⑤ が多用されていることも故ないことではない。

この劇を認識の劇と見た場合この独白で終りをむかえたことになるが、マクベスにこのような真実のときが訪れたのは短い時間であり、舞台の上ではすぐに残酷な「現実」が訪れる。人生を空無とみたものの、彼にはまだ生命が残っている。魔女の予言により不死身だと信じていた確信がくずれると、ローマのブルータスのような武士らしい死に方をするのを拒み、彼はとらわれた猛獣のようにあばれまくって最後には「善」の側に立つマクダフの手に仆れる。虚無の深淵を垣間見た者は自らの生命をもてあましたのである。以前マクベスが平定した反乱軍の一人が梟首となったように今度はマクベスの首が城壁にかかげられるであろう。最後に、やがて新王となるべき勝利者マルコムはマクベスの死後、彼を‘butcher’と定義した。魔女が課した宿命の呪縛は完了し、こうして「悪」は滅亡して、マクベスが造り出した悪夢のような惨劇も終りをつけた。うるわしい自然と生命の秩序は回復し、あの岩つばめのとび交う世界がもどってくるであろう。悪は滅びなければならない。それがこの劇の筋が語っている「教訓」なのである。

マクベスという人物のなかで「卑劣」と「高貴」が同居しているということ、つまり我々は彼を憎みながら同時に賞讃せずにはおれないということがこの劇から受ける感銘を何か複雑にしていることも事実である。しかしながらマクベスに与えられた偉大さと栄光は正義の守護者であるマルコムにもマクダフにも与えられていないということも重要である。マクベスという人物の存在感は大きく、道徳的な共感を得られないにしろ誰も否定しえない劇的真実を全体に背負っているのである。この劇が終了しても、城壁に晒されたマクベスの生首は一つの心象となって、不敵な蔑みの表情でいつまでも我々を睥睨しているのである。他の誰でもないただ彼のみが一つの真実に出会い、一つの普遍に到達したというその事実によって、我々に鬼気せまる不気味なたたかいを挑んでいると言ってよい。マクベスの暗い内面が描いた凄愴な魂の軌跡を考えると、シェイクスピアの悪と絶望に対する洞察の深さと共感の度合を思わないではいられない。ここでは悪は滅びなければならないという大前提の中で、それにもかかわらず悪もまた場合によっては人間を偉大にし得るということが、残酷きわまりない主人公の情念の密度を通して語られていないだろうか。この劇のパラドキシカルな魅力と重い意味を支えるのは、この時期の作者の悪に対する条件付きの共感と肯定だと思われてならない。何故なら、悪もまた人間の条件なのだから。

註

- ① L. C. Knights: *Macbeth in Shakespeare: The Tragedies* (ed. by A. Harbage, Prentice-Hall, 1964) p. 99
- ② G. Wilson Knight: *The Imperial Theme* (Methuen, 1963) p. 127
- ③ A. C. Bradley: *Shakespearean Tragedy* (Macmillan, 1963) p. 300
- ④ この劇を「野心の悲劇ではなく、自己恐怖、自己嫌悪の悲劇」として読み、マクベスの自己認識についてのべる B. McElroy の *Shakespeare's Mature Tragedies* (Princeton University Press, 1973) は参考になる所が多かった。
- ⑤ Kenneth Muir は *Macbeth* (Arden Shakespeare) の註釈の中でこの科白に五個所の biblical allusion を指摘している。

(昭和51年9月30日受理)